

第一章 壊れ行く世界

1

そんな都合良く夢など見られるわけもなく。結局目覚ましに叩き起こされタイムアップとなった。

最初に起きた時はあんなに爽やかな目覚めだったのに、二度寝した御陰でいつも通り体は重く、怠い体を引きずるようにして学校に来ることになってしまった。

「ったく、目が覚めるなら5分位前にしてくれよ」

欠伸を噛みしめ、何処にも向けることのできない不満を口にする。

「数学というつまらない授業にも飽きて来たので、難解な数式を見るのを諦めボンヤリと視線を窓の外に移してみると、校庭を走らされている気の毒な一年生の姿が目に入ってきた。

「あゝあ、可愛そうにねえ」

今にも死んでしまいそうな苦しい表情を見ていると、思わず同情と同時に怒りが湧き上がって来る。

なんだってあんなことをやらされなければならぬのだろうか？

自由が認められている日本国にいながら、授業と称して行われている体罰に近い行為が、公然とまかり通っているのはどうも納得がいかない。

この暑いのに誰が好きこのんでマラソンと言う拷問を望んでいると言うのだ。